

平成30年（ワ）第3194号 安保法制違憲国家賠償請求事件

原告 植村和子，下澤悦夫，寺田誠知 外140名

被告 国

平成30年（ワ）第3796号 安保法制違憲国家賠償請求事件

原告 秋田正美 外77名

被告 国

原告八木巖 意見陳述書

2021年6月23日

名古屋地方裁判所 民事第4部合議係御中

原告ら訴訟代理人弁護士	大	脇	雅	子
同	青	山	邦	夫
同	内	河	恵	一
同	松	本	篤	周
				外34名

私は安保法制違憲訴訟の原告の一人で八木巖といいます。原告に加わった思いを述べさせていただきます。このような機会を与えていただき感謝します。

私は1953年、岐阜県生まれです。郡上八幡の山間の農村で育ちました。生まれたときはすでに戦争から8年たっていました。表面上は戦争の傷跡は過去のものになったように見える時代だったと思います。

我が家には満州から子供たちだけでひきあげてきた親戚の3人の兄弟が間借りしていました。私が小学校にあがるころまでには三人とも自立し

て家を出ていました。一番下の弟にはかわいがってもらった覚えがあります。ただ引き上げてきた時の体験については話すことはほとんどなく、家を出て行きました。多分話したくないという気持ちと、肩身の狭い思いがあったのかと思います。私の祖母などは「町（都会）の親戚は普段は知らん顔なのに、困ったときだけ頼ってくる」などと言っていました。

我が家はその3人をふくめて家族は一時期12人いましたので、居心地が悪かったのかもしれません。末弟の「盛兄（もりにい）」にはとてもかわいがってもらったのですが、当時の体験は聞けませんでした。子供だけで引き上げるとはどういう状況なのか後になって考えましたが、なかなか当時の私には想像できませんでした。ただ「満州」という地名だけは記憶に残りました。

地域では毎年春には「忠魂式」の行事があったりしました。それもあるころからやられなくなりました。私はなぜ止めたんだろうと思いました。子供の目にはよくわからなかったのですが、戦争をどのようにとらえるかということをめぐる世の中は動いていた時代だったかも知れません。それでもなぜか戦争はしてはいけないもの、ということは常に頭のなかに残りました。

中学にはいってから私は大きな経験をしました。私は生徒会の役員になりました。そして二つのことを手掛けました。一つは男子生徒への丸刈り強制。もう一つはある教師の授業内容に関してでした。

問題にしたのはある理科の先生が、授業中に、脱線雑話のような形で、自分が中国へ戦争に行っていたときの経験を話したことでした。

その先生が戦争の話をよくするということは生徒の間では有名でしたが、私はその体験話を最初に聞いたときショックを受けました。

その先生は「ある丘のうえに自分たち日本軍がひそんでいて、通りかかる中国兵を撃った。気分がよかった。」という話しを黒板に図解しながら「チャンコロ」という侮蔑的な言葉を使いながら話したのです。先生が人を殺したという話しをしたのです。

私は彼の「戦争の話」を生徒会で問題にしました。私はこんな話をするのは問題だということを訴えた文章を廊下の黒板に書きました。私は職員室に呼び出されて「お前のやっていることはゼンガクレンと同じだ」といわれた覚えがあります。学校側からは、やり方は批判されましたが、教師があのような話しを授業ですることについては答えがありませんでした。

私たち子供は「戦争はいけない」ということは教えられてきたはずなのに、私の疑問に答えていないと思いました。幼稚な言葉ですが、「大人への不信」を感じました。

戦争に直接に触れていない私が、なぜこのような行動をとったのかを考えてみると、私は当時、深く物事を考えてはいなかったのですが、いけないことはいけないという個人的な「正義感」のような感情と、だれも何も言わないのは変だ、自分が言おうということだったと思います。

感情だけの行動ではなく、やり方を考えられるようになったのは後のことです。

私の長男が高校3年生のときに自衛隊員募集のハガキが来ました。私は家庭のなかに自衛隊が急に入り込んできたように感じて、私はすぐ抗議をしようとしたのですが、後で、これは当人の問題であるし、妻の問題でもあるので、ちゃんと3人で話しあわなければいけない問題だなと思いました。妻は「招集令状みたいで気味悪い」と言っていたし、長男は自衛隊に興味なさそうだったので、次の日に改めて抗議をしました。この時は抗議をして終わりとしなくてよかったと思いました。

高校時代は積極的に何かするという事は特にしませんでした。成績はよくなかったのですが、バイクで登校するとか校則違反のようなことを続けていました。そのころはヒッピー的なピースフルな社会をつくるという考え方に共鳴していた気がします。

高校を卒業したあとは岐阜市の郊外にいた4歳上の兄のところにしばらくいました。その下宿に兄の友人が出入りしていて、その当時のいろんな政治党派の機関紙などをよく持ってきていました。在日朝鮮人問題、日韓問題、部落問題、沖縄問題などが書かれていました。

そのときは共鳴するという事はなかったのですが、世の中の社会問題に触れた気がしました。とにかく自分は世の中のことを何も知らないんだなという気持ちでした。

それから、名古屋に来て名古屋市の下水道局に就職しました。私はいろんな市民活動サークルなどに顔を出すようになりました。とにかく知らないことを知りたいというのが当時の一番の動機でした。

仲間もできてきたので学生のサークルや日中友好市民サークルなどによびかけて、中国映画を上映したり、侵略戦争の実態について勉強する「映画上映グループ恋民（れんみん）の会」をつくりました。

旧日本軍が中国でおこなった蛮行、三光作戦や南京虐殺、731部隊などについて学習したりしました。私のなかには幼いころの「満州」、中学時代の「日中戦争」というキーワードがあり、そのことを詳しく知りたいと思ったのです。満州開拓についても実態は現地の人を追い出しての入植だったことがわかりました。日本人の戦争での苦労も現地の人との想いも重ね合わせていかなければ、実態はわからないと思いました。

72年に日中の国交回復がなされて、日中友好はブームのようになっていましたが、侵略戦争についての真の反省がなければ、本当の日中友好と

いえるのだろうか、中国の人たちは本当には許してはいないのではないかというのが当時の想いでした。

また、韓国でのキーセン・買春観光での日本人観光客の横暴な態度が伝えられたり、タイやインドネシアで日本商品がボイコットされたりなどがありました。再侵略と言われていました。

なぜ日本がここまでアジアで嫌われるのかと考えたときに、アジアで抗議の声をあげる人たちはかつて日本が侵略したり、植民地支配した国と重なっていることに気がつきました。アジアの人たちは日本を許していないし、日本人も反省などしていない、と思いました。

当時私は、職場などでよく韓国、台湾やフィリピンに「旅行」する人がいたのでいさめたりした記憶もあります。

憲法前文で「日本国民は…政府の行為によってふたたび戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し」とあります。しかし、反省と決意はアジアの人に伝わっていないと思いました。

80年代は中曽根首相が靖国参拝をしたり、教科書の侵略の記述が進出に変わったりしたときでした。私はこれは危険な動きだと思いました。

ちょうどそのころ『侵略』という映画を静岡の先生が作られました。その映画は「侵略戦争を担ったのは私たちの父であり、兄であった」と訴えていました。もともと暴力的な人であったわけではなく普通のよき父親や兄であったとしていました。それがなぜ？というのがテーマでした。

私はこの映画の上映会をすることにしました。ドイツの若者たちは親世代に、なぜナチスに加担したのかを問うていくという運動をしていると聞きました。ドイツの若者に少し見習おうとしたのです。名古屋の全区で上映会をしました。そして、必ず感想会を持つようにしました。日本軍が中国で何をしたのか、なぜしたのかを語りあう必要があると思ったからです。

そうした活動をすすめていくことで大きな政治の反動の動きに対抗しようと考えたのです。

戦争体験者も映画会に参加してくれました。しかし感想は「戦争なのでしょうがない」「軍隊はそういうものだ」「教育が悪かった」というものでした。私は「しかたなかった」ということでは被害者に寄り添えないと思っていた。

そんななか、私たちの主催した証言集会でとても衝撃的な話しをしてくれた人がいました。その人は「私は鬼でした」と涙ながら証言しました。そして、中国の収容所で中国の実際の被害者の前で、自分がしたことを告白し、謝罪した、と言われました。そうして初めて鬼であった自分に気づき、人間に変わることができたと言っていました。それまでは中国人より偉いと思っていた、罪の意識もなかったと言われました。

私は戦争を起こすシステムが問題であり、政治が問題と思ってきましたが、それだけではないとその時感じました。被害者の心情によりそわねば、「心からの謝罪」というものはない、被害者、加害者、お互いの理解の上で初めて反省がうまれると思いました。

1995年にはそれまでの活動を通して知り合った人たちと「不戦へのネットワーク」をつくり、反戦、反基地の運動を続けています。沖縄で少女暴行事件が起きました。大きく報道されました、その報道を見て、私は妻に「沖縄ではこういう事件は多いらしい」と他人事のように言いました。彼女は「こんなことは絶対許されない」と強く憤慨していました。私は恥ずかしい思いをしました。そんなこともあり、沖縄の基地問題にもとりくみははじめました。

2001年以後にアフガニスタンやイラクに行った米軍や有志連合の兵士が住民虐殺などをおこなっていたことが次々と明らかになっていきますが、米軍兵士のなかには帰還してから「戦争のリアルを語る」として証

言を続けている人たちがいます。名古屋でも証言集会がありました。その集会は日本にたいして原爆投下と無差別爆撃をおこなったことの謝罪から始まりました。私は彼らの戦争相手国の人にたいする誠実さを感じました。日中戦争での戦争犯罪の告発という活動をしてきた私にはこの集会は共感ができました。それとともに顔の見える交流ということの重要さを思いました。

私は戦争に反対していくには民衆同士の交流、つながりが必要と考え始めました。そのなかでお互いを大切にする人権意識も芽生えるのではないかと考え、国際協力NGOに関心をもちました。

そして1996年に結成されたペシャワール会名古屋に知人にさそわれて参加し、以来そこで役員をしています。報告会、講演会や写真展などをして支援してきました。

ペシャワール会はアフガニスタンで医療や水路建設を続けている中村哲医師を支援しているNGOです。ご存じのように中村さんは2019年に現地で銃弾を受けて亡くなりました。ペシャワール会は戦争反対を訴える団体ではありませんが、私は中村さんに大きな影響を受けました。

中村さんはこういうことを言っていました。憲法9条は現実の力です。戦争や暴力に訴えないことで信頼を得られる。それは大きな力になる。ただしそれは戦争するよりも忍耐力が必要、とも言われていました。

また、中村さんは現地の宗教や文化・習慣に批判めいたことを言うことはなく、むしろ理解尊重していて、現地で横暴な態度をとることもありませんでした。これらは理念というよりも長年の現地での活動の教訓でした。

2001年、ペシャワール会は大きな事件に立ち会うことになりました。9・11テロのあとに、アメリカはアフガニスタンを攻撃するとしていま

した。中村さんは干ばつに苦しむアフガニスタンに空爆することに強く反対しました。

私はアフガニスタン攻撃に反対する街頭行動にも参加し、食糧支援のためのカンパ活動をおこないました。たくさんのお金が集まり、3億円ほどがすぐに集まり、ペシャワール会は空爆下で現地に27万人分の食糧をとどけました。記録映像で食糧を積んだトラックがカイバル峠を越えていくのをみたとき、とてもうれしかった覚えがあります。

日本の政府はアメリカとともに空爆する側に立っていたわけですが、私たちはペシャワール会を通じて日本の善意をアフガニスタンの人々ととどけることができたと思いました。一方的に戦争に加担させられることなく、アフガニスタンの民衆とつながることができたと思いました。中村さんは自衛隊派遣は有害無実と訴えていましたが、軍事ではないかたちで貢献を形にすることができました。中村さんはこのとき、「日本人もまだまだすてたものではない」などと言っておられました。

私のこれまでの戦争に反対する活動と、自ら得た教訓について述べさせていただきました。

2015年9月安倍政権は安保法制を強行採決しました。それ以後戦争ができる国作りがすすみ、中国との対立もおおられています。

戦争の動きに反対するというのは私の日常的な感覚です。そのために努力をしてきたつもりです。安保法制でこの努力が否定されていくようで、たえられません。私の人生が否定されているようでたえられません。再びの戦争に反対するために、みずからの戦争犯罪を証言した人たちの勇気、空爆下で丸腰で人道援助をしている人たちの命がけの努力、すべてをないがしろにしているようでいたたまれません。

自衛隊が戦争をする可能性は否定できなくなっています。新たな「鬼」も生まれてきます。「国際社会において名誉ある地位を占め」るためにも、どうか違憲の憲法判断をし、日本もまだまだすてたものではないことを示してください。

ありがとうございました。

以上